

父の戦死と母

泉区支部 北村 岑雄（子）

戦没者 北村 義一

戦没地 南方ナウル島

母は教員の長女として第二人妹二人の七人家族で小さい時は子守をし、学校を卒業すると横浜や東京へ奉公に出た。その後嫁ぐと同時期に第二人は戦地に出征し大陸で戦死、妹は軍需工場へ出て班長になり過労死した。夫は南方に出征し終戦後の帰還船の中で死亡し水葬されたと聞いている。（私は父の顔も声も知らない）数年して母の父親が農協の勤労奉仕で突然事故死し、その後母親が自転車に衝突され十日後位して破傷風で死亡した。相次ぐ家族の死に母は途方に暮れたに違いない。

生計は農業で畑と水田を耕作していたので、食べるものには苦勞しなかったが、お金では大変苦勞したようだ。私は小学校の三、四年生頃から十二月に入ると枯れた木を切り次に薪割りをし、毎年二十七日か二十八日に三時起きして餅つきをした。前日の米とぎも大量で時間がかかった。

祖父は左手が不自由だったので、つき手は殆ど私一人だった。餅米を蒸かすための薪割を一週間位前に行なったのが準備運動にもなって、身体も学年で一番大きかったこともあり、終わった

後も身体は何でもなかった。水田は谷戸田のためセビを造り、時期により田植え、刈取りは忙しく手伝いに来る人もいた。畑は冬(麦踏)以外は手伝うことが多かった。野菜、穀物、果樹や花卉などを作った。農家以外の親戚の人は陽気がよくなると食糧難のこともあり野菜類を貰いに来た。収穫したものは保土ヶ谷方面に背負い籠やリヤカーで商いに行った。背負い籠の時の帰りは天王町から二俣川まで相鉄線に乗り帰った。天王町や二俣川で買い物をするのがうれしかった。月末には柿と仏花を作り売りに行った。仏花は皆さんに好評であった。時には大八車で肥取りを同じ地域に行くこともあった。坂が急のところもありこぼれるので杉の棒で縦に長くブレーキ代わりに後付けした物を使ったが道も悪く急なためコントロールが大変難しく、着いた時には大分減っていたことも。肥溜めが道路脇にありそこに入れた。そこで寝かせて畑に使ったが、今では見ることもできない。

この原稿を書くにあたり、祖父母と乳飲み子の私を抱え二十代半ばで一家を支えなければならなくなった母(現在九十二歳)の当時の労苦に思いを巡らせ、感謝の気持ちでいっぱいである。私事だが、中学校で野球部へと勧められ入部したが経費がかかるので退部し、修学旅行にも行かれなかった。すぐにでも働いて母を助けたいと、試験を受けて特別奨学金を貰い工業高校へ進学した。私の人生も父の戦死によって方向転換を余儀なくされたが、今は子供や孫に恵まれ、定年退職し有意義な日々を送っている。

懐かしい田園風景には鉄道の駅やマンションなどができ、現在横浜を代表する高級住宅地に変身している。父や祖父母が見たら腰を抜かすほど驚くに違いない。

終戦六十五年が経ち、戦争の体験と戦後の生活についての記憶がすっかり薄くなり、いや全く消え去ろうとしている。特に行政の考え方が最近顕著である。戦後長いこと行政（区役所）が行なっていた遺族会の事務を手放して、区社会福祉協議会などの外郭団体に業務移管していること。そもそも国と行政からの赤紙一枚で戦地に出向き戦死した者の遺族に対して失礼ではないかと思う。末筆ではあるが遺族会も高齢化が進んでいるので行政としてぜひ再考していただきたい。